

# 第4号



○平成30年度  
・第4回理事研修会

発行  
 北海道小学校長会  
 札幌市中央区北5条西6丁目  
 第二北海道通信ビル306号室  
 TEL 011-218-9850  
 FAX 011-218-9851  
 e-mail: mail-h.s.k@dousho.jp  
 http://www.dousho.jp/

## 平成30年度 第4回理事研修会

☆平成30年12月17日(月)10時30分より  
☆ホテル ライフォート札幌

### 〈学習会〉北海道教育委員会

- 男女混合名簿について  
義務教育課主幹 川端香代子様
- 教員の欠員と選考検査について  
教職員課主幹 山下 幹雄様
- 学校における働き方改革について  
教職員課主幹 桑原 知己様

### 【報告事項】

- 全連小第230回理事会の報告
- 教育情勢について

- 会務・各部の活動について
- 第70回全連小北海道大会(函館)について
- 第62回道小胆振・苫小牧大会の参加割当等について
- 道教委・教育局への要望内容の集約について
- へき複連の活動や要望について
- 道特協の活動や要望について
- 平成30年度第1回運営委員研修会について(平成30年度中間決算・監査報告)
- 企画研修委員会について
- 道小研究関連分担の提出について
- その他

### 【協議事項】

- 道小大会運営研修会を受けて
  - ①道小大会運営研修会(反省・引継)の報告
  - ②道小教育研究函館大会を振り返って

- 第62回道小教育研究胆振・苫小牧大会について(シンボルマーク等)
- 次年度の活動計画・総会宣言文の作成について
- 次年度の役員選考について

### 【連絡】

- 第5回正副会長研修会・理事研修会について
- 次年度の諸会議年間計画(案)について
- 退職会員の感謝状及び記念品について
- 次年度の全道会長研修会の話題集約について

12月17日の第4回理事研修会は、全連小理事会の報告、へき複連や道特協の活動や要望など、チーム道小としての重要な報告に続き、第62回道小教育研究胆振・苫小牧大会、来年度の活動計画・総会宣言文の作成、企画研修委員会についてなど、次年度に向けての重要な事項について協議を行った。また、13時50分からは、第2回専門部研修会が行われた。ここに第4回理事研修会について報告する。

### 1 開会の言葉 ----- 片桐由博 副会長

### 2 会長挨拶(要旨) ----- 本間 会長



最初に、本日の理事研修会から、来年度の研究大会に向け、新たに出席いただく研究指名理事を紹介する。  
胆振管内校長会の瀬川 恵(せがわ けい)校長を紹介する。どうぞよろしくお願いいたします。

10月4日、5日に開催した全連小北海道大会(函館市)では、皆様のご協力のおかげで大成功に終えることができた。素晴らしい青空の下、全国から2,500名近くの校長をお迎えした大変有意義で、実りのある研究大会であった。副会長の皆様には、開閉会式での仕事に加え、分科会グループ討議での司会、理事の皆様には、分科会の趣旨説明や会場運営責任者など、2日間にわたり、フル回転で力添えをいただいた。お礼申し上げる。

本日の理事研修会の中では、全連小北海道大会を振り返り、大会運営研修会を受けての報告や、理事の皆様から、感想・意見をいただくこととなっている。よろしくお願いいたします。

次に、11月15日に開かれた「全連小常任理事会」の報告である。「小学校教育の充実・改善に関する要望書」については、「小学校教育の質を維持し、わが国の将来を担う子どもたちの教育を推進するためには、教員定数の改善は不可欠」と訴え、人的・物的措置の一層の充実と教育諸条件の整備に向けて、9項目にわたり要望している。この要望書は、12月13日午後、全連小役員と共に、衆議院議員会館及び参議院議員会館に届けた。  
続いて、「全国大会開催に関わる全連小の運営規則等」についてである。

北海道は、8年に1度、全国大会が回ってくる。次年度は、秋田大会、再来年度は、京都大会となっている。

次は、「小学校プログラミング教育の手引」の改訂である。今年3月に公表された手引を改定し、小学校プログラミング教育のねらいに関する説明の充実や指導例が追加されている。

続いて、「改正著作権法第104条の13第1項の規定に基づく『授業目的公衆送金補償金』の額の認可に係る審査基準及び標準処理期間に関する意見」である。

教科書や公的機関が作成した著作物をICTを活用した授業等で使用するときは、著作権や著作料等が発生することのないようにしてほしいというものである。

この内容について、全連小種村会長名で文化庁著作権課長あてに意見書を提出している。

次に、都道府県の対策担当者、調査研究担当者が、3地区に分かれ、情報交換した内容についてである。

地区によって、働き方改革の進捗状況や新学習指導要領移行措置並びに全面実施に向けた準備状況に違いがあることや、各都道府県の全国学力・学習状況調査結果の活用と学力向上施策など、情報交換された。

続いて、道内の情勢である。

「学校の教育環境整備に係る地方財政措置における、おおよその基準財政需要額」についてである。

教育環境整備に係る平成30年度の地方財政措置について、市町村ごとに額が示されているので、整備充実に向けた予算要求の資料として活用願いたい。

次に、「北海道胆振東部地震における見舞金」についてである。

前回の第3回理事研修会当日まで、全連小をはじめ、福島県、岡山県、神奈川県、山形県、青森県、秋田県の6県の校長会より見舞金が送られてきた。その後、さらに宮城県より義援金が送られてきた。見舞金、義援金の使途、配分については、役員研修会で検討し、「連絡」の中で、神谷会計理事より報告する。

最後になるが、本日の理事研修会の報告の中において、平成30年度第1回運営委員研修会、いわゆる、中間監査の中間報告がある。そこで、本年度の監査委員長の仲倉監査委員長に、本日は、出席いただいている。仲倉委員長、どうぞ、よろしくお願います。

### 3 議長選出 ----- 鈴木宏宣 副会長

### 4 報告事項

#### (1) 全連小第230回理事会の報告 ----- 森 敏隆 副会長

※詳細は「全連小速報」を参照  
種村会長より

- 北海道胆振東部地震の見舞金について
  - 教育関係の来年度の概算要求について
  - 働き方改革について
  - 総合的な学習の時間の弾力的な運用について
  - 指導要録の改善について
- の5点について、お話があった。

#### (2) 教育情勢 ----- 大石 事務局長

国内の情勢について、3点、お話する。  
最初に、「全国学力・学習状況調査」についてである。

道教委が地域別分析結果を公表した。都市部ほど、平均正答率が高くなる傾向にあり、正答率が9ポイント以上開いた教科もあるなど、地域間の学力格差が改善されていない結果となっている。道教委は、「授業改善が遅れたり、学校以外の勉強の機会が少なかったりする地域がある」と分析し、教務主任や学年主任を中心に授業改善を進めるよう研修を充実させることを示している。

具体的には、「主体的・対話的で深い学びの視点」からの授業改善として、知識を相互に関連付けて理解したり、問題を見出して解決策を考えたりする過程を重視し、思考力・判断力・



表現力を高める指導方法の工夫改善に努めること。検証改善サイクルを確立することや小中の連携した取組の充実として、教育課程の接続などの共通の取組、小中合同の研修の取組に努めることなどを求めている。

道教委の佐藤教育長が、管内ごとに全国学力・学習状況調査の分析と重点的な改善策を示すロードマップを作成するとし、「市町村教委に、私自身が出向いて協議するなど、道教委を挙げて学力向上が図られるよう取り組む」との考えを示している。

2点目は、「新学習指導要領の移行期の動き」についてである。

まずは、「指導要録の簡素化」についてである。

学習指導要領の改訂を受けて、評価の在り方を検討している中教審のワーキンググループで「今後の方向性について」の「たたき台」を示した。特に小学校に関わる部分では、指導要録の文章記述欄、つまり、様式2の大幅な簡素化を図ることが検討事項にあがっている。「指導に関する記録」に記載する事項を全て満たす通知表を作成する場合は、「要録と通知表の様式を共通のものとするのが可能である」と明示され、今後の進展が注視される。

新学習指導要領の移行期に関して、もう1点、「プログラミング教育の手引の改訂」についてである。手引は既に3月に作成されているが、11月6日に改訂されたものは、説明を充実させ、事例を追加している。教育課程間で行われるプログラミングに関する学習活動を、A B C Dの4つに分類し、指導例を追加している。総合的な学習の時間の他に、4年社会科の都道府県の学習や、6年家庭科の自動炊飯器に設定されているプログラミングを通して、炊飯について学習する事例などがある。

2022年度から高校の学習指導要領が全面实施となり、「情報I」がスタートをして、2024年度には、大学入学共通テストでの受験科目となる。子どもたちの進路にも関わるプログラミング教育であるので、もっと具体的な情報がほしいところである。

3点目は、「学校における働き方改革」についてである。

文科省は、学校の働き方改革を検討している中教審の特別部会で答申素案を12月6日に公表した。答申素案のポイントは、残業時間の上限目安；原則月45時間、年360時間。特別な事情があっても月100時間未満、2～6か月の月平均で、80時間、年720時間まで。違反した場合の罰則は設けない。年単位で調整する変形労働時間制の導入となっている。文科省は、働き方改革の今後のスケジュールについて、素案をパブリックコメントに示し、年明けに答申をまとめた後、2019年、来年度に学校の業務整理など見直しを進め、地方公務員のうち、教員に限り、年単位での変形労働時間制を適用できるよう、規則の改正や夏季休業中の研修や部活動の見直しを進める。そして、2021年に年単位の変形労働時間制導入の流れを想定している。「給特法の見直しを素案に入れるべきだ」との意見があったが、残業代が、1年間で9千億円となること、財務省から財源を引き出すことが困難になったこと、人材確保法の関係などから、積み残しとなった。

今回の素案では、自発的な行為とされていた時間外の授業準備や採点も勤務時間として認められ、労災認定が容易になるとの見方がある。今後は、教員の一人当たりの業務が膨大になっている実態を改善するためにも、業務の見直しや変形労働時間制だけではなく、教員定数を増員するなどして、一人当たりの業務量を軽減することを、優先してほしいと考える。

最後に、「学童保育の職員基準の緩和」についてである。

現在、1か所に有資格者を含む2人以上の配置が義務付けられているが、これを拘束力のない参考基準に改め、資格要件も自治体の判断で決められるよう、年明けの通常国会で児童福祉法の改正案として提出される予定である。背景には、資格要件をもつ「放課後児童支援員」の人材不足と、待機児童の問題があり、全国知事会などの要望がある。学童保育の安全確保と直結するため、今後の動きには十分に注視していく必要がある。

その他、大学入試改革、児童生徒の読解力に焦点を当てた資料、いじめや児童の安全の他、道内の教育情勢、研修部長の川島校長先生の校長塾の資料も載せている。

ぜひ、学校経営の参考にしていただきたい。

**(3)会務・各部の活動 ----- 梶野 事務局次長  
【会務報告】**

※会務日誌参照(道小HPに掲載)

**【各部の活動報告】**

**①経営部 ----- 竹嶋 充 部長**

本年度の「地区別教育経営研究会」は、7月30日の上川地区、旭川地区から始まり10月16日の札幌地区を最後に、全ての地区で終了した。胆振東部地震の影響により、開催できなかった地区もあるが、開催された地区からは、教育の今日的課題を中心に話し合いが行われ、「校長の職能向上」に向けた研究会であったと報告を受けている。各地区の事務局を中心とした校長先生方のお力添えに感謝申し上げる。

各地区に出向いた道小・道中事務局幹事が中心となり報告書を作成し、まとめたものが「平成30年度地区別教育経営研究会(概要)一覧」である。他地区の様子をご覧になり、次年度の各地区の参考にさせていただきたい。

なお、地区の担当の校長先生にお願いした「地区別教育経営研究会のまとめ」の原稿については、全原稿がそろい次第、道小HPに掲載するので、ご覧いただきたい。

2点目は、「法制研究集録第49集」についてである。

道中が担当し、現在作成中である。来年2月には、発行できるよう作業を進めている。

3点目は、「経営部本年度の活動報告」と「31年度の経営部の活動計画案」についてである。

2月の第5回理事研修会に、報告する予定になっている。

**②研修部 ----- 川島政吉 部長**

1点目は、「第70回全国連合小学校長会研協議会北海道大会」「第61回北海道小学校長会教育研究函館大会」についてである。

10月4日、5日の日程で開催した全道大会を兼ねた全国大会には、全国から約2,500名の校長が参集し、無事終了することができた。道小が、これまで積み上げてきた研究の成果と課題を受けて、どの分科会においても、素晴らしい研究発表がなされ、それを基に、熱心な研究協議が行われた。

「分科会の充実こそが、最大のおもてなし」の理念の下、参画型の分科会運営を行ったが、アナライズカードやフリップの投影による視覚化やグループ協議の観点の焦点化、キーワードによるまとめの工夫などにより、参会者一人一人の課題意識や参加意欲の高まりが見られ、参画型の分科会は、更に充実してきた。

グループ協議においては、北海道の方々が、司会や記録の役

を務めたが、「北海道の校長先生の効果的な司会進行により、グループ協議が大変有意義でした」というアンケートもあり、北海道のよさを大いに伝えることができた。各地区の理事の校長先生の事前の関わりに改めて感謝申し上げる。

また、去る11月19日に「運営研修会」を開催し、午前「大会反省会」、午後、平成31年度の開催地である胆振地区への「引継会」を行った。

2点目は、「小学校教育 別冊55号」の発行についてである。

大会の研究集録として発行している「小学校教育 別冊」であるが、函館大会実行委員会の編集委員会及び各分科会の記録担当の先生方には、大変ご苦勞をいただいた。おかげさまで、原稿が今月末に完成し、2月22日の第5回理事研修会には、お手もとに届くように作業を進めている。

3点目は、「教育改革等に関する調査」についてである。

7月に、全連小より依頼のあった教育改革、教育課程、現職教育等の調査用紙を各地区の研修部長に依頼、8月に回収し、全連小へ送付した。3月には、調査結果が「研究紀要」の冊子となってお手もとに届くことになっている。

最後、4点目は、「地区研究活動」についてである。

掲載する原稿については、各地区の研修部長から、全て提出いただいた。今後、北海道小学校長会のHPに「地区研究活動」にアップされる。ご協力に感謝申し上げます。

**③対策部 ----- 砂川昌之 部長**

1点目は、「31年度全道会長研修会の共通話題」についてである。

この研修会は、様々な教育課題が山積している中、各地区の課題を交流し、その解決に向けて話し合うことを目的として行われている。共通話題の集約については、協議したい話題を4～5項目記入し、2月1日までに対策部の副部長までメールで返答願う。来年度の会長研修会は、6月14日に行う予定である。共通話題については、次年度の対策部が各地区の集計を基に原案を考え、事務局において最終的に決定する。

2点目は、「全道調査」についてである。

31年度は、30年度同様に「広域人事に関する調査」と「退職校長動向等調査」の2つを継続して実施する予定である。「広域人事に関する調査」は、その後の経緯等を追うこと、実際に広域人事を経た方々が、その後、戻ってどう貢献しているかをさらに検証していく。

「退職校長動向等調査」では、再任用・再就職を含め、その動向等をさらに経年変化として調査していきたいと考えている。

**④情報部 ----- 横澤英三 部長**

1点目は、「会報『教育北海道』323号」についてである。

皆様のご協力で、12月7日の時点で原稿がほぼ、そろい、3月の発行に向けて編集集中である。

2点目は、「道小情報」についてである。

文教施策・各課懇談会の報告である「道小情報・道中だより号外」は、12月5日に発行した。また、「道小情報第3号」第3回理事研修会の報告は、電子データで、11月2日に発行、電子メール等で会員へ配信した。同時に、道小HPにもアップした。なお、第4号は、本日の第4回理事研修会の報告となり、電子版での配信となる。

3点目は、「道小HP」についてである。

現在、全連小研究協議会北海道大会の開会式、全体会、シンポジウム、閉会式の様子など、写真を掲載している。なお、分科会については、趣旨説明や資料、研究発表資料、運営概要等の詳しいデータも掲載している。これからも、大会の記録として掲載を継続していく。

また、地区活性化支援事業の「実践レポート報告」についても、20本全てをトップページに掲載した。学力向上への取組や特色のある学校経営の在り方など、渾身の力作ばかりである。是非、多くの会員にご覧いただきたい。

4点目は、「全連小関係」である。

「小学校時報」12月号には、全連小研究協議会北海道大会の分科会の報告概要が13ページにわたり、掲載されている。執筆者は、道小事務局幹事である。一度、目を通していただきたい。

なお、2月号には、稚内市立富磯小学校 川原 修子校長が、「全連小研究協議会秋田大会」に寄せて期待すること、3月には、道小研修部が、来年度の「道小教育研究胆振・苫小牧大会の進捗状況」を執筆する予定である。

#### (4) 第70回全連小北海道(函館)大会について

白幡俊一 実行委総務部長

10月4、5日の全連小研究協議会北海道大会へのご協力に感謝申し上げます。全道の皆さんの協力のおかげで、素晴らしい大会にすることができました。函館市校長会として、お礼を述べる。

2点について、報告する。

1点目は、「大会アンケート」についてである。

800名余りの方々から回答を得て、函小研修部を中心に集約した。「良い」が、昨年の佐賀大会、一昨年の高知大会と比較しても、大変、素晴らしい数字となった。特に運営面については、90%を上回り、大変、良い数字であったことを報告する。

2点目は、「移動」についてである。

函館のバス業界、タクシー業界の方々から、「アリーナで何千人と集まる会合は、多々あるが、少しの混乱もなく、また全員が、整然と静かに乗り降りしている姿に感動した」という意見であった。本当に感謝申し上げます。

#### (5) 第62回道小胆振・苫小牧大会の参加割当等について

新井 研修副部長

来年度は、胆振・苫小牧大会であるので、4ブロックの胆振は、100%、空知、日高は、70%、その他の地区は、50%の割当とした。「発表」が割り当てられている地区については、人数を増加している。なお、参加割当人数を下回らないようお願いする。参加割当人数の変更については、今年度中に道小事務局まで連絡をいただきたい。

#### (6) 道教委・教育局への要望内容の集約について

梶野 事務局次長

道教委・教育局への要望の集約結果を踏まえ、「次年度も継続して要望していくのか」、「文言を見直す必要があるのか」、「要望内容・項目そのものを削除してもよいのか」などについて、道小と道中とで協議しながら整理し、来年度の5月に道教委へ提出する予定の「北海道文教施策・予算策定に関する要望書」を作成していく。

#### (7) へき複連の活動報告と要望活動について

温泉 敏 指名理事

今年度の道へき複連の活動や現状について、申し上げる。

道へき複連では、今年度の研究推進計画が第9次長期5か年計画の5年目にあたり、評価・発展に取り組んでいる。全国組織は、北海道から計画が1つずれており、全国は、第8次となっている。道へき複連の研究は、「長期5か年計画」に基づいて行っており、次年度からは、新しい第10次長期5か年計画に入り、今日的な課題に対応した内容になっている。

第67回全道へき地複式教育研究大会が、9月20日・21日の両日、後志管内5町3村8会場で行われた。約420名が参加し、熱心な討議がなされ、大きな成果をあげることができた。

第68回全道へき地複式教育研究大会空知プレ大会が、9月28日に3市2町7会場で行われた。次年度からの第10次長期5か年計画を見据えた内容で、次年度に大きな期待ができる大会となった。

全国へき地教育研究連盟の研究図書編纂では、今年度、渡島地区と檜山地区の実践が、実践事例集に掲載される。

また、京都で開催された全国大会では、宗谷地区が提言を行い、これまで培ってきた宗谷の実践が高く評価された。

調査活動では、全へき関係の他に、道へき複連では、「組織検討委員会」を開き、各地区から現状と課題、要望等をあげ、改善を図ったり、文教施策に反映したりしている。

関係機関との連携では、へき地小規模校研究センター、道研やOB会と連携している。「HATOプロジェクト」では、「複式授業のDVD(4教科)」を作成し、複式授業を初めて経験する先生に見てもらえるようにしている。

今年度は、本連盟結成70年の節目の年となっており、記念誌の作成を行った。

次年度からの大きな課題は、へき地級見直しの対応である。実施は、2020年になるが、次年度から取組を始める必要がある。

#### (8) 道特協の活動報告と要望活動について

三谷 和 指名理事

本協会は、昭和50年に設立され、今年で43年目を迎える。

平成19年に、特殊教育から特別支援教育に変わり、12年目を迎えた。

少子化による道内の小中学校の統廃合が進んでいる中、道内の小中学校の約8割に当たる1,400校が、本協会に加盟している。この数字は、減っておらず、今後も、現状維持か右肩上がりに増えていくことが予想される。

5ブロックで25地区に分かれて、研究活動を行っている。「一人一人の教育的ニーズに応え、豊かに生きる力を育む特別支援教育の推進と充実」を研究主題に掲げ、全道の校長先生の学校経営の充実に努めている。また、職能の向上のための研鑽、会員相互の連携、関係諸機関、並びに関係諸団体、特に、中学校、高等学校、特別支援学校、そして、道教委はもとより、北海道立特別支援教育センターとも連携を深めて活動している。

5月の定期総会研修会においては、北海道立特別支援教育センターの小原所長にご講演をいただいた。また、8月の下旬には、北海道立特別支援教育センターの教育課長、教育室長を講師に研修を行った。

11月1～2日には、室蘭市において、「全道経営研究室蘭大会」を開催し、道教委の上林教育指導監に、ご講演いただいた。

年明けの3月には、全道副会長会と研修会を行って、今年度の活動が終了となる。

全国との関係については、今年度は、全特協の香川大会に、道特協会員から12名が参加した。

現在、道特協で、調査部を中心に、調査活動を行っている。

12月末に集計の予定である。2月末もしくは3月初旬に、その結果を、目に見える形で公表する予定なのでご覧いただきたい。

また、年2回の「会報誌」、年3回の「道特協だより」で、活動の様子等の報告を掲載している。お手もとに届いた際には、一読を願いたい。

「成果と課題」についてである。

11月1～2日に実施した全道経営研究室蘭大会は、胆振地区の地震災害の関係で開催を心配した。大会では、四つの提言を行ったが、その一つが、安平町の校長の提言であった。提言の準備ができるかどうか心配したが、予定どおりに発表をいただき感謝をしている。当日、参加できない会員もいたが、大会参加者は、約190名となった。道内各地から参集し、情報交流を含め、研修を深めることができたことは大きな成果である。

移行期に入った新学習指導要領は、障がい者の権利に関する条約の批准後における初めての改訂となる。その理念が、今回の改訂に色濃く反映されている。この点の理解の浸透が、まだまだ課題である。今後も理解を更に深めていく必要がある。そのためにも、道特協の大会や研修会に、参加者が少しでも増えるように皆様のご協力をお願いしたい。

来年度の全道経営研究大会は、来年の11月初旬に開催の「オホーツク・北見大会」となる。再来年度は、全特協の全国大会が、函館で開催される。会場は、函館市民会館である。期日は、例年8月に行われている。しかし、この年は、東京オリンピックが開催され、8月は、東京の校長先生は、オリンピックに協力をしている。また、講演や助言を依頼する文科省の調査官からも、8月は避けてほしいという要望が来ている。それを踏まえて、11月初旬の全国大会開催を考えている。理事の皆様にもご承知いただきたい。開催時期が近づいたら、改めてお知らせするので、ご支援をよろしく願いたい。

#### (9)平成30年度 中間決算・監査報告について 神谷 会計理事

神谷会計理事より9月末現在の中間決算報告があった。

その後、仲倉監査委員長より、中間監査報告があり、収支について誤りなく、正確に処理されていることが確認された。

#### (10)企画研修委員会について ----- 大石 事務局長

今年度の「企画研修委員会」は、11月26日に第1回目が行われ、本日、理事研修会終了後に第2回の「企画研修委員会」を行う。委員長は、小樽市立長橋小学校 木村敏夫校長先生に決まった。委員会は、3回を予定している。

平成28年度の「組織の在り方検討委員会」で出された「まとめ」には、「将来的な財政の逼迫が想定されることから、組織改革に取り組み、財政の健全化に努める」とあり、北海道・函館大会終了後には、「道中との連携の在り方・ブロック再編や学校数減少に伴う地区再編などについて検討し、組織の安定化に努める」と明記されている。

第1回の企画研修会では、『道小の組織力の充実・向上を目指すための組織改革』『更なる会費の値上げをしないための創意工夫』について検討している。

ただし、一定の結論を導くには、3回の会議では難しく、第5回理事研修会には報告書を出し、次年度以降に引き続き検討していく方向で考えている。今後、組織力の充実・向上及び更なる会費の値上げをしないために、これからの全連小北海道大会の在り方や年間の支出を見直し、創意工夫ができる部分について具体的に検討していく予定である。本年度の検討内容のまとめについては、2月の第5回理事研修会において、報告する。

#### (11)道小研究関連分担の提出について ---- 新井 研修副部長

2020年度は、全連小の研究主題が変わる年度となる。それに伴い、道小の副主題も修正される予定である。

2020年度の道小大会は、オホーツクで行われることが決まっている。2021年度は、石狩地区での開催となる。その後の道小の大会の担当地区と発表地区について、相談いただき、報告願いたい。

## 5 協 議

### (1)道小大会運営研修会(反省会・引継会)を受けて

新井 研修副部長

#### ①道小大会運営研修会(反省会・引継会)の報告

全体を通して、大変よかった。只今、大会集録を取りまとめ、1月中に完成する予定である。

道小大会運営委員会における引継事項について、3点説明する。

1点目は、「事務局幹事と大会実行委員会との連携」についてである。

電子メール等による連絡を大切に、分科会運営役員との情報共有を密に図った。また、道小のHPを介して、情報発信し、それを基に、分科会の充実を図ることが出来た。今後も継続して取り組んでいくべきである。

2点目は、「分科会の充実」についてである。

「見える化」の工夫をしたことにより、参加型の分科会がさらに充実したものとなった。視覚的に訴える方法は、大変有効であった。

3点目は、「グループ討議」についてである。

本年度は、全国大会と兼ねていたため、分科会運営役員は、運営に徹した。来年度は、運営役員も討議に参加することで、分科会参加者との一体感が生まれ、分科会の充実につながるので、全分科会で運営役員が討議に参加することを基本とする。

<報告を確認・承認>

#### ②道小教育研究函館大会を振り返って(理事より感想・意見)

##### 1ブロック-----小樽市立長橋小学校長 木村俊夫 理事

「第12分科会 自立と共生」の分科会運営については、分科会運営役員相互によるメールを活用した打合せが大変有効に機能した。運営責任者や司会者の事前確認を綿密にしたお陰で、安心感をもって業務を遂行することができた。

分科会前の準備の際、パワーポイントによるプレゼンテーションデータが、パソコンにインストールされているフォントによって、画面表示がずれる部分やプロジェクターを投影する際に照明を暗くすると手元の原稿が読めない状態となるなど、事前に機器や会場の状況を確認する大切さを改めて実感した。

分科会のまとめにおいては、「分科会まとめ」で使用するプレゼンテーション画面を統一した基本フォームで行うという方法も検討する必要がある。

**2ブロック……稚内市立潮見が丘小学校長 大島 朗 理事**

全連小函館大会では、昨年度の3倍の参加者があり、名簿作成や欠席者の確認と対応など、大変な業務であったと思う。

また、全体会場までの交通の確保と誘導、分科会会場においても140～220名と大変多く、会場の大きさや特徴が違う中でレイアウト、機器の設置は、大変、苦勞されたのではと感じた。

分科会については、参加者の満足度も高かったと感じている。

第11分科会「社会形成能力」では、発表者が宗谷と沖縄石垣島と全国大会ならではの発表となり、小グループでの協議も終始、大変、盛り上がった。大会に参加される校長先生方へ事前に道小のHPの分科会運営概要等に目を通すよう働きかけ、全国への連絡を徹底したことは、大変貴重であり、今後も連絡ツールとして、当たり前化していくべきだと強く感じた。

**3ブロック…厚沢部町立厚沢部小学校長 小助川 浩 理事**

全体会場への移動、全体会場から分科会会場への移動については、時間差での移動、貸切路面電車の手配等もあり、スムーズに移動できた。

非常時に対応できるよう「緊急時マニュアル」の準備、そして対策、参加者の安全への配慮がなされており感心した。

第6分科会では、縦に長い会場で、前と後ろの2か所にスクリーンが用意されており、配慮を感じた。分科会の進行について練られており、グループ協議の際、話しやすかった。

**4ブロック……登別市立若草小学校長 土井嘉啓 理事**

全体的な運営は、スムーズであった。会場移動は、大きな声やプラカードで案内をするなど、混乱することなく、スムーズに動くことができた。

前日の打合せも、担当との細かなメール等でのやり取りをしながら、事前の打合せや発表資料も検討できたので、スムーズにできた。

第10分科会では、始まる前に名刺交換をしたこともあり、協議を始める前から皆さん仲良く、話に花が咲いていた。協議も、停滞することなく、時間が足りないくらい盛り上がっていた。まとめ、フリップの作成もきちんとできたので、良い協議ができていた。「まとめ」については、全国大会で、グループ数も多く、各グループの討議内容が十分に把握できなかったため、予め用意した「まとめ」と、全体協議で発表したグループの内容を加味しながら行った。

**5ブロック……北見市立中央小学校長 吉田昌広 理事**

第5分科会「豊かな人間性の育成」では、運営担当者が、チームワークで分科会運営を行い、たくさんの成果を残すことができた。

討議の柱を意識させるアナライズカードの活用により、参加者全員の参画意識が高まった。また、実物投影機を活用して、グループ協議のキーワードを全体に示す工夫により、成果と課題を焦点化しながら分科会を進めることができた。

会場の準備に関わり会場見取り図などは、前日にいただいたが、当日会場に行ってから準備は、やはり大変であった。会場が縦長で、前後に小さなスクリーンを設置してあったことから、パソコン操作の担当を急遽前後に配置するなど、対応が慌ただしかった。

全体の運営においては、全体会や分科会の運営、会場の案内、

お弁当や飲み水にまで気を配るなど、「おもてなし」が至る所を感じられ、参加者からたくさんの好評をいただいた。

**(2)第62回道小胆振・苫小牧大会について**

**瀬川 恵 指名理事**

胆振管内校長会では、「胆振・苫小牧大会」の開催に向け、平成29年度に「準備委員会」を立ち上げ、今年度、業務内容を「実行委員会」に移行した。

本日は、キャッチフレーズとシンボルマークの2点について、説明するので、協議いただきたい。

キャッチフレーズは、キーワードを「世界とつながる」、「未来を紡ぐ子ども」そして、開催地である苫小牧市の地理的環境を意識した「北のゲートウェイ」とした。

「苫小牧市」は、道央自動車道が通り、世界初の内陸掘込港である港を有し、新千歳空港が隣接している。「陸・海・空」の交通の要所であり、世界各地から人、物、そして、情報が集まる。

「胆振・苫小牧大会」を通して、苫小牧の地に全道各地から参加する校長先生に「今、求められる学校経営」について、熱く議論を交わしていただき、その成果を苫小牧の地から、各地へ広く発信したいという願いを抱いている。

このような願いから、キャッチフレーズを「世界とつながる北のゲートウェイ苫小牧から未来を紡ぐ子どもたちに豊かな感性と想像力を！」と提案する。

シンボルマークについては、キャッチフレーズをイメージし、港を行き交うフェリー、頂上のドームが特徴的な樽前山、工業都市のシンボルとしての赤い煙突の工場など、苫小牧の代表的な風景を配し、苫小牧の市章をイメージした線で全体を包み込んだ。空に向かってはばたく白鳥は、苫小牧の「市の鳥」でもあり、「研修成果の発信」を表現している。

<提案どおり承認>

**(3)次年度の活動計画・総会宣言文の作成について**

**大石 事務局長**

<提案どおり進めることを確認:道小HPに掲載>

**(4)次年度の役員選考について**

**松村 事務局次長**

<提案どおり進めることを確認:道小HPに掲載>

**6 議長退任**

**鈴木宏宣 副会長**

**7 連絡**

**(1)第5回正副会長研修会・理事研修会** **梶野 事務局次長**

**(2)次年度の諸会議年間計画(案)・会計** **神谷 会計理事**

**(3)退職会員の感謝状および記念品** **梶野 事務局次長**

**(4)次年度の全道会長研修会の話題集約について** **磯島 対策副部长**

**8 閉会の言葉**

**佐藤 寛之副会長**